

カンボジア便り

坂 本 恭 章

I

プノンペンに到着した日の夜、カンボジア語の先生になってくれる人、わたくしを下宿させてくれる人、その他もう1人の計3人のカンボジア人と夕食を共にしたが、かねてからの、カンボジアの土を踏んだらカンボジア語しか使わないとの決心通りに、席上何とかカンボジア語で過ごすことができ、それまでの畳の上の水練も、あながち無駄ではなかったと、嬉しくもあり、またやや得意でもあった。(もっとも現在では、空港やホテル、郵便局の中、それに警官に呼びとめられた時などのように、外国人であることを早く知らせたほうが有利な場合は必ずしも決心を守っているわけではない。)

下宿が壁の塗りかえ中で、やむなく安宿にひとまず落着いた。翌朝、市場の方角を女中にたずねると、広東語しかわからないという。おまけに文盲で筆談もできない。フロントは空っぽなので、いいかげんに見当をつけて歩き出すと、200mも行かないうちに中央市場に出た。ちょうど道角に半分露店の食堂があったので入ろうとすると、店員にいきなり「出る」といわれて驚いた。まだ何もしていないのに追い出される覚えもないし、「出る」

は「チュニユ」[ceɲ] だが、今のは「チュニユ」[cəɲ] に聞こえたので、エッと聞きなおすと、近くの椅子を引いて、「チューニユ」と指すので坐れということらしいと安心して腰掛けた。まわりを見まわすと、ラーメンのようなものを皆が食べているので、あれをもってこいと命じる。食べてみるとなかなかおいしい。勘定をさせる頃にはもう外国人であることを見破られていて紙片に数字を書いてくれた。このラーメンを覚えておこうと、名前をたずねると、ラーメンが5リエルで、コカコーラが5リエルで、この点心が2リエルという返事。この料理がたいへんおいしいから、名前を知りたいんだといくら説明しても分かってくれず、会計に文句をつけているものと誤解していて、加算の正しいことばかり説明してくれる。とうとうカウンターに坐っていた人がやってきて、「どうしましたか？」と日本語でたずねられた時には、昨夜の自信はすっかりどこへやらであった。

下宿に落着いてからも、官吏である主人とリセーの学生である長男の話すことはだいたい分かるのであるが、小さな子供や主婦、それに主婦の両親の話がさっぱり聞きとれない。街に出て買物をする時も、あまりスムーズとはいえず、長男にカンボジア語とカンボジア語の通訳を頼むほどであった。これらは、プノンペン方言と標準語との差異に起因するものであった。

学校では、正書法に基づいた発音を教え、これが良い上品な言葉とされている。学校教育を受けた人はこれを話すことができるが、そうでない人は、普通、友人や家族間で話されている俗語しか話せない。もっとも、ラジオ等の普及で、全然分からないというわけではないが、無理に標準語を話そうとして、全然違う形をこしらえて話しかけてくることさえある。その上、商店員はほとんど全部華僑であるので、中国語なまりで話すので、それ

まで標準語しか知らなかったわたくしには、さっぱり理解ができなかったわけである。

この方言と標準語がどのように異なるかを簡単に説明したい。

1. 2音節語の第1音節が摩滅して、ほとんど単音節語化する。(カンボジア語では、単音節語と2音節語が大部分である。)

例えば

カニユチョコ [kaŋcak]
→カチョコ [kəkak] <ガラス>
カムバット [kambət]
→カバット [kəbət] <ナイフ>
チョムグー [comɣuː]
→チグー [cəɣu] <病氣>
サンダエク [sandaek]
→スダエク [sdaek] <豆>
サムペア [sampeax]
スペア [speax] <拝む>
ピダーン [pidain]
→プダーン [pdain] <天井>
ドンカウ [daŋkəu]
→タカウ [təkəu] <虫>
ドムナウプ [damnaəp]
→タナウプ [tənaəp] <モチ米>
ボンハーニュ [baŋhaːn]
→パハーニュ [pəhaːn] <示す>
ボンヴル [baŋvuːl]
→パヴル [pəvuːl] <回す>
チャニユチャム [cəŋcəm]
→ニユチャム [ŋcəm] <養う>
チョニユチェアング [cəŋceəŋ]
→ニユチェアング [ŋceəŋ] <壁>
ボニユチー [baŋciː]
→ニユチー [ŋciː] <表>
トンサーイ [tənsaːi]
→ンサーイ [nsaːi] <兎>
ボントップ [bantop]
→ントップ [ntop] <部屋>
コンカエプ [kaŋkaep]

→ンカエプ [ŋkaep] <蛙>
ロンヴォアン [rəŋvoən]
→ンヴァン [ŋvoən] <賞>
ヴォンヴェーグ [voŋveːŋ]
→ンヴェーグ [ŋveːŋ] <迷う>
アムバル [ʔambəl]
→ムバル [mbəl] <塩>
ボムポング [bampɔŋ]
→ポング [pɔŋ] <管>
ソーセー [soːseː]
→セー [seː] <書く>
ピーサー [piːsaː]
→サー [saː] <飲食する>
アニユチャング [ʔaŋcəŋ]
→チャング [cəŋ] <そのように>
アニユチューニユ [ʔaŋcəːn]
→チューニユ [cəːn] <どうぞ>

2-1)二重子音中の [r] は消える

クラブー [krəpəː]
→カプー [kəpəː] <ワニ>
チラモホ [cramox]
→チャモホ [cəmoːx] <鼻>
トラチュク [traci·ək]
→タチュク [təci·ək] <耳>
プロニャプ [praŋap]
→パニャプ [pəŋap] <急ぐ>
プレイ [prei]
→ペイ [pei] <森>
クレー [krɛː]
→ケー [k'ɛː] <ベッド>
クラハ [krax]
→ケアハ [k'eaːx] <厚い>
プラム [pram]
→ペアム [p'eam] <5>
スラー [sraː]
→セヤー [sejaː] <酒>
トライ [trəi]
→タイ [t'əi] <魚>
チュルーク [cruːk]

- チューク [c'u:k] <豚>
 クラオム [kraom]
 →コーム [k'o:m] <下>
 クラオイ [kraoi]
 →コオイ [k'o:i] <役>
 2-2) 単独の [r] は [h] になる
 リーク [ri:k]
 →ヒーク [hi:k] <拡がる>
 リエン [ri·ən]
 →ヒエン [hi·ən] <習う>
 ルング [ruŋ]
 →フング [huŋ] <硬い>
 ローム [ro:m]
 →ホーム [ho:m] <毛>
 3. その他にも
 トマイ [t'məi]
 →クマイ [k'məi] <新しい>
 チマー [c'ma:]
 →スマー [sma:] <猫>
 ゴグット [ŋoŋut]
 →ラグット [laŋut] <暗い>
 等といういろいろあり、
 ソック・ペアング [sok peaŋ] がスロック
 ・バラング [srok baraŋ] <フランス国>で
 あることが分かるまでには、しばらく会話を
 中断して考えなければならない。
 さらにこのほかに
 クニョム [k'nom] → ニョム [nom]
 または→キニョム [ki:nom] <私>
 プロボン [propon]
 →ピーングポーング [pi:ŋpo:ŋ]
 <妻>
 ポンマーン・カエ [ponma:n k'ae]
 →マーン・ケー [ma:n k'e:]
 <何カ月>
 プサー・トマイ [psa: t'məi]
 →サカマイ [sakamai] <中央市場>
 のような、中国・ベトナムなまりのカンボジ
 ア語も広く使用されているので、全く頭が痛

くなくなってしまう。

日本からのお客と話しこんでしまった深夜
 の帰途に不審尋問され、ついカンボジア語で
 対応したため、パスポートを見せるまでは日
 本人と信じてくれず、連行されかけたりした
 のも、要は怪しげなカンボジア語を話す変な
 カンボジア人がいくらでもいるということな
 のである。

II

9月中旬に、バタンバンにある農業セン
 ターの木村氏にアンコール見物につれていっ
 ていただいた。

ちょうどメコンの最増水期で、新聞等はピ
 エンチャンの水害を報じていた。道中、一面
 の水で、水田は全く水没しているもの、稲の
 葉先がわずかに水面に出ているものとまちま
 ちであった。民家もかなりが床上浸水してい
 て、住民が自動車道路の端の舗装していない
 部分に掘っ立て小屋を建て、牛をつないで暮
 らしているのが交通をやや妨害している。そ
 うして、この道路が一種の堤防になっていて、
 道路の左側の水位のほうが右側に比べて少々
 高い。ところで、トンレーサープ川は道の右
 側を流れている。飛行機から眺めた様子では、
 いかにもメコンなり、トンレーサープ川が溢
 れた感じであったが、実はそうではなくて、
 現在水田を水浸しにしている水は、天から降
 った水が、トンレーサープ川にまだ流れこめ
 ずにいるらしい。つまり国土の大半が水たまり
 になってしまったのではないかと思われた。

バタンバンからシエムリエプの間のほう
 が水害がひどいようであった。

見物をすませて、日が暮れてから帰途につ
 いたが、驚いたことに道路が冠水している。
 特にひどい雨は降らなかったはずだがと住民
 にたずねると、遠くでたくさん降ったからだ、
 という返事であった。

冠水している部分をいくつか通りこして帰

路を急いだが、とうとう 30cm もの深さがある所につかり、早く向こうの小高い部落まで行かないと明朝にはもっと深くなるぞと脅かされながら、ようやくのことで戸数 200戸あまりの部落にたどりつき、それから先はこのあたりで最も低い所ときいて、あきらめて車中で一泊することに決心した。

寝支度をととのえていると、さきほどこの先は水深 50cm くらいあると教えてくれた人が引き返してきて、自分はこの村の学校の教師だが、わたくしの家に泊ってはどうか、と親切にすすめてくれるので遠慮なく家に上がりこんで、いろいろな話をきいた。

戦時中に日本軍が規律正しく、かつ住民に親切であったこと、この後再びフランス軍がやってきた時に、日本兵と結婚していた婦人を皆でかくまったこと、将校が記念にと残していた軍刀などを見せてくれたりした。

この日本軍占領時代の頃の話は、その後もたびたび耳にしたが、すべて良い思い出話ばかりで、この国ばかりは戦争の時の話がでて、安心して聞いていられるようだ。アメリカの原子爆弾さえなかったら、日本は勝つだろうに残念だった、と皆でなぐさめてくれたことすらある。

このように、少なくとも一般大衆には、日本の人気はとても良い。シクロに、日本人がカンボジア語を勉強してくれるとはとても嬉しいと感激されたり、雑貨屋の店先で、華僑である主人が中国語を紙に書いてわたくしに読ませ、このように日本と中国とは同じ文字を使っている兄弟である、自分のほうが、カンボジア人よりも日本人に近いんだと、その場に居合わせた人々に自慢をしたことすらある。ただ、日本兵の印象がよほど良かったのか、それともムッシューが来るぞ、といえば泣く子も黙ったといわれるフランス人を追っ払ったのが忘れられないのか、あるいはその後、これといった感心すべきことがないのか、日本

に関する良い話はいつも20数年前のことに限られているのは、いささか淋しいことである。

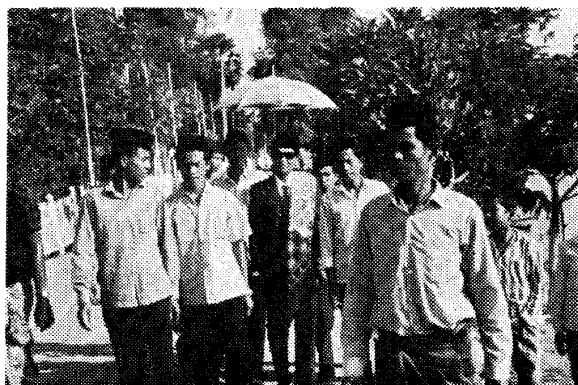
翌朝目をさましてみると、なんと向こうの小高い丘まで約 4km の間が大河と化して、濁水がとうとうと流れている。しかも、どう楽観的に眺めても水位は昨夜と同じくらい、むしろ高くなっているようである。一週間くらい水はひかないという話をきいて、乗用車はそこにおき去りにして、腰が高くディーゼルで、少々の水にはビクともしないバスでセンターまでたどりついた。その数日後には、このバスさえ不通になってしまい、数年来の大洪水ということであった。

これを機として、トンレーサープ川は向きを変え、メコンへと流れはじめた。5月現在、トンレーサープ川はほとんど水流がとまっており、水位が最も低いのではないかと思われるのであるが、最高水位の時と比べると、その差はだいたい 6～7m くらいではないかと思われる。わずかこれくらいの差で、はるか 200km も先の大湖が何倍にもふくれ上がり、ひいては大洪水をひき起こしたり、そうかと思うと、乾期にはからからに干上がってしまうのであるから、ダムを作って灌漑すれば、米はいくらでもとれるのではないかと一口にいっても、なかなか大変なことだろうと思われる。現にダムを作る計画があると耳にしているが、ダムに水が 6～7m もたまった時には、国土の大半が洪水になっていた、などということになるのではないかと素人のわたくしには心配なことである。

III

日本の技術者が建設したのが、日本の援助でできたと誤報されて、いつも問題を起こす民社同盟大橋をトンレーサープ川の対岸へと渡った所にチャムの部落がある。ここでチャム人と知合いになることができた。

この時同行していたカンボジア人が翌日わ



チャム人の結婚1 新郎は舟から上陸してモスクに入る。



3 ついで、他の人々とも挨拶、両手をさし出して互いに片手をはさむ。



2 モスクの中でお経を唱え新婦の長兄（父親が故人となっているので父の代理）と握手して、これで婚姻が成立。在席は男性のみ。



4 婚姻が成立してから、新婦と初対面しベッドの上で並んで坐り、右の身体だけ写っている人のお経を聞く。列席するのは女性のみ、特別の好意でわたくしに列席、撮影を許可してくれた。

たくしの所に来て、これからはわたくしとの交際に充分気をつけて、恨まれるようなことをしないようにしなければならないという。つまり、あのチャム人は呪術を心得ているから、わたくしがかれに頼んで呪い殺すかもしれないと心配しているのである。この呪術（トヴァー・アムプー [t'və: ʔampɛ:]）は信じる人が多く、リセーを卒業した青年ですら信じているようである。呪われた人の腹中に小さな針が口から入り、それがだんだんと大きくなってついに絶命する。針でなくて、水牛のことも多い。そうして、これは呪術であるから医者には分からない。モンコル・ボレイの日本人の医者（医療センターのこと）のレントゲンですらだめで、3日と経たないうち

に死んでしまうのだそうである。入れ墨をしている人が多いが、これは、その呪術から身を守るためである。このような魔力を供えた人はあちこちにいる。インフォーマントの友人に、大勢の人と一緒に写真を撮っても、決してフィルムに写らない人がいると聞いて、ぜひ撮らせて欲しいと頼んだところ、わたくしのカメラは上等だから、そのカメラの力には勝てそうにないと断わられてしまった。高級カメラの魔力には勝てないのだそうである。もっとも、わたくしのカメラも、アンコールワットの夜の踊りを撮影して帰ったところが、写っているのは人間だけなので、なんだワットの威力にはかなわないではないか、と評判が落ちてしまった。またこの呪術は病気の治

療にも使われる。普通の風邪とか頭痛腹痛は、昔の貨幣とかスプーンとかで、ゴリゴリと身体をこすって皮下出血させると治ってしまう。わたくしも一度してもらったが、欠けた茶碗に薬が入っていて、それをちょっと塗ってはゴシゴシとこする。この薬がなんだかなじみのある匂いなので名前をたずねると、石油という返事であった。これで治らない時に先生（ローク・クルー [lo:k kru:]）を呼ぶ。たいていは呪文を唱えて、プッと息を吹きかけた水を飲むことになるのだそうだが、重病の時には秘伝の薬を調合する。わたくしのインフォーマントの1人もこれを心得ていたが、その最も得意とするのは、古文書を焼いた灰とのことだった。五、六人もの人にかかっても治らなかった精神病の娘もこれで良くなったそうである。

麻疹にかかった子供に人糞をよく乾かしたものを飲ませるのは、かれに限らず広く行なわれているとのことであるが、抗体が糞に出るものなら医学的に根拠があるかもしれない。

呪術でもう一つ有名なのは、スナエ[snae]である。これは、依頼して作ってもらったところの、呪文のこもった薬を目指す相手の身体に塗っておけば、その人の魅力のとりことになってしまうという媚術である。第二王妃が正妻の地位を奪わんとして、これを用い、首尾よく第一王妃を追い出すことに成功するが、ついにスナエを用いたことが露見して、象に踏み殺させるという死刑に処せられるという映画もあったが、伝説等にもよく出てくる。現在でも、ダンスホールのダンサーが、客がつかないと収入にならないので、金持の客にスナエをかけて、毎夜自分の所に通わせるが、せっかくこうして得た収入も大半がスナエ代として消えてしまうとのことである。

留学期間の残り2カ月のあいだに、誰かわたくしにスナエをかけてくれないかと期待しているしだいである。

国際稲作研究所より

法 貴 誠

I

今年の1月26日にフィリピンの国際稲作研究所(The International Rice Research Institute 略して IRRI)に research fellow として来て以来5カ月近くになる。こちらの研究所には今までにも日本から多くの方々が訪問されており、またここで研究に従事された方も多い。IRRI のことについては以前に research fellow としてこちらで研究生活を送られた京大農学部の高村泰雄氏の報告(『東南アジア研究』3巻1号, p. 144)にも詳しい。わたくしは今のところ研究所の中にいることが多いので、こちらの事情については一部のことを理解したにすぎないが、今までに見たり聞いたりし、感じたことなどを思いつくままに書いてみようと思う。

II

研究所はマニラの東南約70kmのところであり、車で約1時間半の道程である。ハイウェイと呼ばれている国道を走るのであるが、日本のハイウェイとは大違いである。道路幅は日本の一級国道ぐらいいはあるが、ところどころ舗装がやぶれ穴があいている。しかし、ここを走る車は多く、しかもみなひじょうに